

KCELS

Newsletter No.12
MARCH 1997

第21回KCELS大会を終えて

上 紀 子

3月に卒業を迎える学生が、卒業後どのような方面に進んでいくかは、送り出すものにとっては大変関心のあることである。国際化というプロセスの進み中で、語学力を生かしあるいは認められて、国際協力団体、交流団体、その他の国際機関を初め、企業からの海外派遣、出張で国際社会を舞台に活躍する英文学科の卒業生が少しずつ増えてきているのは大変喜ばしいことである。グローバルな視座で考え世界の国々の人々と信頼に基づく関係を確立する努力を払い、世界の“懸け橋”として国際的な連帯のネットワークの中に積極的に参加していく卒業生が更に増えていくことを願っている。

そんな願いを込めて、今年度のKCELS年次大会は、異文化コミュニケーションをテーマに取り上げた。Seton先生を大会運営委員長として、12月6日(金)に開催。特別講演に、かつて国際基督教大学で教鞭を執っておられ現在はコンサルタントとして異文化ゆえに起こってくる諸問題を解決するための様々なプログラム作成や、異なる背景を持った人々のチーム作り等、国際関係の最前線に直接携わってられるSheila Ramsey博士をお迎えし、熱のこもったお話を伺った。学部学生、大学院生、卒業生に加え、同窓会の英語教室の方々も参加下さり活発な質疑応答で会を盛り上げて下さった。また、例年のごとく、卒業生による研究発表も行われたが、大学院に進み文学、英語学の研究の道を歩んでいる二人の優秀な卒業生の発表は力強いものであり、この会を更に充実したものとしてくれたと思う。

英語力がより必要となるであろう21世紀、本学科学生が、在学中に国際語としての英語をしっかりと身につけ、卒業後各人の選んだ道で活躍してくれることを切に願うものである。



■特別講演 (要旨)

Creating Intercultural Partnerships: A Necessity for the Twenty-First Century

Sheila Ramsey, PH.D.

It is abundantly clear to all of us these days that we live in a globally defined system of interrelationships. A common question is in the air: How can we be uniquely together, standing together on the common ground which is necessary for doing what needs to be done to live peacefully and fully, in creative and innovative ways in the challenging days and years ahead? I believe that it is helpful to consider the concept and the reality of "Partnership" in exploring this question.



To begin, it is clear to me that we cannot create partnerships that are viable or vital without first being in an ongoing, alive and creative partnership with ourselves. What does this mean? We all know that there is a very clear difference between feeling alive, inspired, joyful and creative or feeling fired, de-energized, and not interested in much of anything. Imagine trying to do the challenging work of making decisions or solving problems in an intercultural group when we feel so disconnected from our own sources of motivation and inspiration! When we are not comfortable or compassionate with ourselves, how can we be so with others?

The possibility of being “living bridges”, the possibility of being able to work and live and love with those who are markedly different from us is related to a particular frame of mind and heart. We might describe this frame of reference as present when we are able to embody : 1) a spirit of inquiry, 2) the suspension of judgment, 3) being open to outcome, 4) listening with our hearts and our heads, and 5) remembering our full potential in all situations.

As we are in partnership with ourselves how then can we consciously create partnerships with others? Some interesting and useful suggestions come from experience in the construction industry in the US and from the US Army Core of Engineers. These people work together on very massive projects like building dams and airports. They need to cooperate very closely rather than compete : they need a mindset of common interest rather than seeing each other as adversaries for all actually share the risk in completing a successful project.

From their experience arise some specific considerations for creating partnerships. The key elements seem to be : 1) TRUST, of each others' motives and a belief that each will do what they say they will do, 2) EQUITY in considering all interests and needs in creating goals and a win-win mindset, 3) DEVELOPMENT OF MUTUAL GOALS AND OBJECTIVES that represent the needs and interests of all involved, 4) TIMELY COMMUNICATION so that they are continually informed of what all others are thinking and doing, 5) MUTUALLY DEVELOPED IMPLEMENTATION STRATEGIES so that their actions may be coordinated and they all agree on the actions to be taken, 6) DEVELOPMENT OF A JOINT CONFLICT RESOLUTION PROCESS so that when there is conflict they have a shared process to engage in to prevent individuals getting stuck in how to resolve the issue 7) SHARED CELEBRATION AND ACKNOWLEDGEMENT when the project is complete to honor everyone involved.

In closing, I would ask you to consider how you personally can be a “Living Bridge”. I would hope that we can take these suggestions from those who build very real bridges and reflect personally upon creating conscious partnerships in our lives and work. I mean partnerships that are marked by synergy, by creativity, that are engaging and motivating and in which we can express our talents and uniquenesses. We certainly need to be members of such partnerships to do the work ahead of us in the next century.

■研究発表 (要旨)

On the Case of Subjects of English Verbal Gerunds and Related Issues

石野 牧

補文構造に関する統語的問題を考える時、統語構造上同一または機能上非常に類似した構文を比較することが有意義である。特に本発表では、英語の補文構造のうち共通してV-ingという形態の語彙を持つ(1)Verbal Gerundと(2)Perception Construction (PC)、また、同じ非時制節として機能するがV-ingではなくto不定詞を用いる(3)ECM Construction (ECM)を比較検討する。

(1) I remember [his/him] giving his money to his friend].

(2) I saw [him giving his money to his friend].

(3) We believe [him to be a genius].

(1)Verbal Gerundsはその主語の格標示の点でPOSS-ing (his…ing)とACC-ing (him…ing)に分類される。これらは文体上の変異と見なされることもあるが、その統語的振る舞いを比較すると2構文の範疇は異なっているといえる。既にHorn (1975)やReuland (1983)でもPOSS-ingが名詞句である一方ACC-ingが文として機能することが指摘されている。そこで、本発表でもACC-ingを文として、PCやECMと同一の範疇(TP)と仮定し、それらの構文間の統語的振る舞いの差異を、それぞれの主語(him)の対格照合の仕組みが異なることによって説明する。

まず構文を特徴づける-ingについては、既にBaker (1985), Abney (1987), Nakajima (1991)等で-ingを統語上様々な語彙的・機能的範疇の主要部に位置づける分析がとられている。そこで-ingの本質を考えてみると、-ingは名詞化接尾辞か動詞屈折接尾辞かのどちらかとして扱われるべきであるといえる。

さらに、Chomsky (1992, 1995)のMinimalist Programで提案された素性照合の理論をもとに、V-ingに関して[±Agr]もしくははその指定を受けない[+N]としてのV-ingという違いを設けることを提案し、具体的には以下の3点を挙げる。(I)V-ingというNとして機能していた語彙が、Vの性質を獲得していくことによって[Agr]に関する素性[+Agr]が獲得されるとする。(II)POSS-ingの場合は全体がDPで、-ingが+Nである名詞化接尾辞として派生の段階でDの補部がNPとなるのに対し、ACC-ingの場合は全体がTPで、-ingが+Vとしての動詞屈折の接尾辞としてTP投射まで含まれるとする。(III)ACC-ingがPCやECMと比較して受動化などの統語操作において違いがあることから、ACC-ingの場合は主語の対格素性が[-T,+Agr]という素性指定されたTによって

照合されるとする。このような仮定をすることにより、類似した構文として取り上げたPOSS-ing・ACC-ing・PC・ECMの統合的差異を、より包括的に捉えることができるといえる。

更に発表時には、このような構文の歴史的な変化に対する同一視点からの分析の可能性を今後の課題として取り上げたが、紙面の都合上ここでは触れない。

『マルタ島のユダヤ人』 —アウトサイダーの悲劇—

魚住香子

クリストファー・マーロウの『マルタ島のユダヤ人』は、ユダヤ人商人・バラバスの個人的な欲求が引き起こした悲劇というよりもむしろ、マルタ島という社会の中で人種・宗教・職業など様々な点で異質であるということが招いた悲劇であると考えられる。それは、彼の復讐の動機がstrangerであるというだけで受けた不当な扱いにあることや、また劇中、彼が自らもたらした状況というものはなく、その自発的な行動の前には必ず、外部から転がり込んできた状況があるというところからも推察される。つまりこの劇は、マルタ島の中でアウトサイダーであるが故に引き起こされるバラバスの悲劇を描いたものと言える。

バラバスは、財産を強制的に奪った島の総督に復讐するために彼の息子を殺したところから、その罪を隠すために、また自らの身に降りかかってきた不利な状況を克服するために、次々と周りの人間を殺していく。彼の手にかかって絶え間なく人々が死んでいき、更にはそのやり方があまり狡猾で非常であるため、彼の極悪非道さが『』を支配していると感じるのは当然の反応と言える。しかしそれは、それ自体が目的となっているようなものではなく、この異質な社会で生き延びていくために彼が取った手段であり、欲望（ここでは金銭欲）の維持によって、アウトサイダーである彼が常に危機にさらされているそのidentityを守ろうとした抵抗の表れであると解釈できる。

バラバスの犯した罪は決して正当化できるものではないが、その死が痛みを催すものでないような人物達を犠牲者とすることによって、この劇は彼の犯した罪の大きさよりもむしろ、それを引き起こした周りの状況により焦点を当てていると言える。マーロウはこの劇で、当時のイギリス人が抱いていたユダヤ人観に忠実にバラバスを描きつつ、同時に背景にあるマルタ島という社会機構を浮かび上がらせ、キリスト教の偽善がはびこる社会を痛烈に風刺している。

キャンパスニュース

*本城智子教授(1958年に着任)は本年3月末に定年ご退職され、名誉教授とされます。

*Collin Meir客員教授は、一年の任期を終えられ3月英国へ帰国されます。

*かわって、1997年4月より、アイルランドからMaurice Harmon氏が客員教授として就任されます。

*同じく、1997年4月より、東森勲氏(英語学)が教授として就任されます。

*Mark Davidson専任講師は2年間の任期を終えられ、1997年3月に米国に帰国されます。

*かわってWarren R. Frerichs氏が英語担当の専任講師として、就任されます。

訃報

本学名誉教授・元学長丹波トモ先生が肺炎のため1月19日、西宮市のアガベ甲山病院にてご逝去されました。享年95歳。天上の平安をお祈り申し上げます。

会員消息

*別府恵子氏

イタリアのThe Rockefeller Study and Conference Centerで開催された“Scholars, Writers, and Artists Program”(1996年8月)にて研究発表。

*平井雅子氏

英国Nottingham大学で開催された、International Lawrence Conference(1996年7月)にて研究発表。

*Barbara Leigh Cooney氏

東京創価大学で開催されたJALTのシンポジウムPeace Education and Language Learning(1996年6月)で研究発表。

*Troy H. Titterington氏

米国フロリダで開催された、International TESOL Conference(1997年3月)にて二種の研究発表。

*Catherine Vreeland (Broderick)氏

オーストラリアのSydney大学で開催されたAustralian Universities Language and Literature Association XXIX Congress(1997年2月)において研究発表。

会員による出版紹介

◇別府恵子氏・キャサリン・ブローデリック氏・石井光子氏・難波江仁美氏・田中栄子氏・辻本麻子氏

『イーディス・ウォートンの世界』(別府恵子編、共著)弓プレス 1997年1月

◇別府恵子氏・風呂本惇子氏・林和仁氏・三杉圭子氏・エモリー・エリオット編『コロンビア米文学史』(共訳)山口書店 1997年1月

◇橋本登代子氏

『近代英国小説ーヒロインからのメッセージ』
(共著) 近代文芸社 1996年7月

◇金城盛紀氏

『シェイクスピアと花』 東京出版 1996年7月

◇上 紀子氏・渡邊慶子氏

『コンサイス英文法辞典』(安井稔編、共著) 三省堂 1996年11月

神戸女学院大学英文学会 会則

(1) 名称

本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。

(2) 目的

本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。

(3) 構成

本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。

(4) 活動

年一回、英文学会を開催する。

Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。

その他。

(5) (a)上記の活動運営のために運営委員会をおく。

(b)運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送料など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

1995年4月1日施行

編集後記

会員消息、出版物等多数お知らせ頂きありがとうございました。紙面の都合上、本年度のもののみに限らせて頂きました。御了承下さい。

KCELS Newsletter 編集委員

(1996年度運営委員)

- ◇B. L. Cooney ◇正木芳子 ◇溝口 薫
◇C. Seton ◇上 紀子 (ABC順)

KCELS Newsletter No.12

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532